

生石4遺跡
第2次発掘調査報告書

1988

山 形 県
山形県教育委員会

お いし
生石 4 遺跡
第2次発掘調査報告書

昭和63年3月

山 形 県
山形県教育委員会



Dトレンチ木材群検出状況



Eトレンチ枕列・柴(柵)検出状況

序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和62年度に実施した、酒田市生石4遺跡の緊急発掘調査の結果をまとめたものです。

近年の開発事業の進展に伴い、地下に埋もれた埋蔵文化財との関わりも増加する傾向にあります。県経済と県民福祉の向上を目的とする諸開発事業と、県民ひいては国民の文化遺産である埋蔵文化財との関係については、状況に応じた適切な対処が望まれているところです。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境づくりという立場から、これらの間の調整をはかり、今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存です。

終わりに、本調査に御協力をいただきました関係各位、並びに地元の方々に感謝申し上げるとともに、本書が埋蔵文化財に対するおのかたの理解の一助となれば幸いです。

昭和63年3月

山形県教育委員会
教育長 小野 孝

例 言

- 1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受け、昭和62年度に実施した「昭和62年度県営圃場整備事業・山元地区」に係る「生石4遺跡」の第2次緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査期間は、昭和62年4月15日～同年5月14日の延15日間である。
- 3 遺跡の所在地は、山形県酒田市大字生石字榑野内新田である。
- 4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 主任 調査員 佐々木洋治 (山形県教育庁文化課 埋蔵文化財主査)

同 佐藤庄一 (同 係 長)

同 野尻 侃 (同 主任 技 師)

現場主任 名和達朗 (同 技 師)

調査員 月山隆弘

同 須賀井新人

事務局 事務局長 後藤茂彌 (山形県教育庁文化課 課 長)

事務局長補佐 土門紹穂 (同 課 長 補 佐)

事務局員 菅原徳嘉 (同 芸術文化主査)

佐藤大治 (同 文化財主査)

長谷部恵子 (同 主 事)

氏家修一 (同 主 事)

高橋春雄

- 5 挿図縮尺は、遺構については1/60・1/200、遺物については1/2・1/3・1/6・1/9を基本とし、それぞれにスケールを示した。図版の遺物は、挿図の縮尺に合わせた。

挿図中・表中及び本文中の記号は、SK—土壌、EP—柱穴・杭、RP—土器、RW—木製品、●—杭・遺物出土地点を示す。

挿図中の方位は、磁北に合わせた。

- 6 本報告書の作成については、太田 優・名和達朗が担当執筆し、挿図・図版については、前田和子・徳永裕子・徳正宜子がこれを補助した。

本書の編集は、阿部明彦・名和達朗が担当し、全体は、佐々木洋治が総括した。

目次

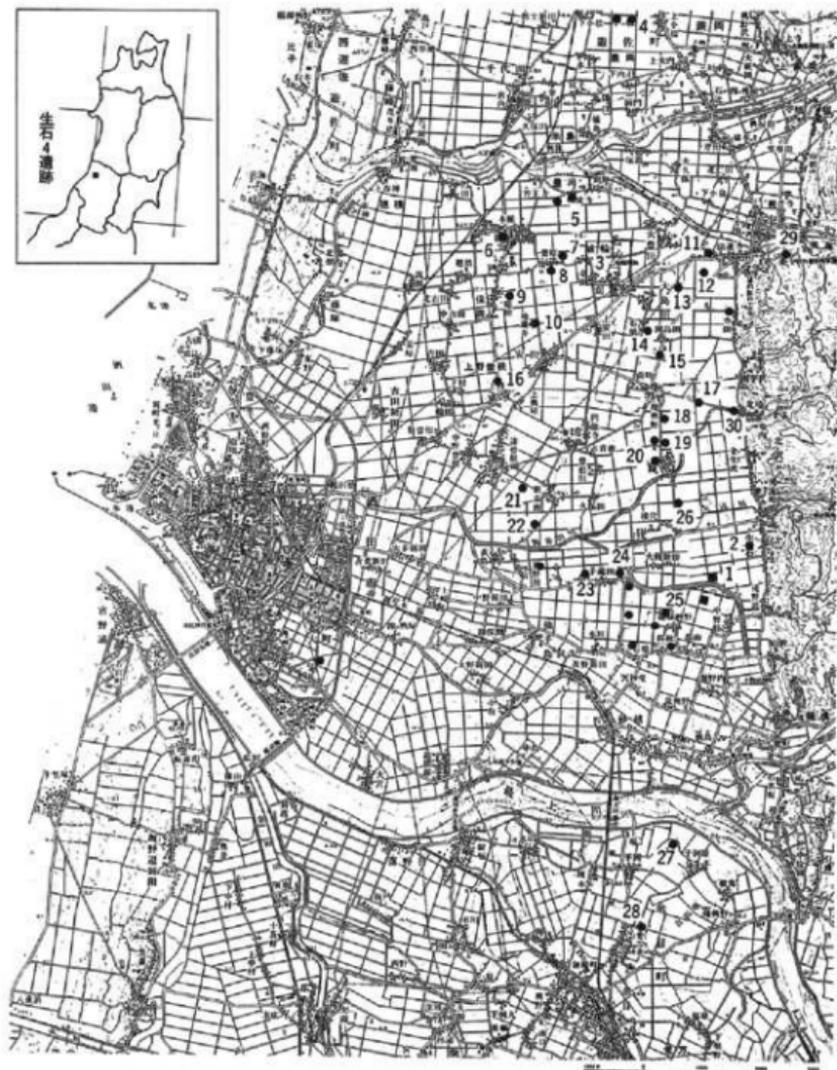
I 調査の経緯	1
II 遺跡の概観	1
III 遺構	
1 SK1土壌	2
2 杭列	2
IV 出土遺物	
1 土器	9
2 石製品	9
3 木製品	12
4 金属製品	14
5 自然遺物	14
V まとめ	23
付表-1 須恵器・陶器観察表	21
付表-2 赤焼土器観察表	21
付表-3 石製品観察表	21
付表-4 木製品観察表	22

挿図目次

第1図 生石4遺跡		第8図 木製品実測図(1)	12
第2図 遺跡全体図	3	第9図 木製品実測図(2)	15
第3図 土層柱状図	6	第10図 木製品実測図(3)	16
第4図 遺構・遺物検出平面図	6	第11図 木製品実測図(4)	17
第5図 遺構・遺物平面図	8	第12図 木製品実測図(5)	18
第6図 出土土器実測図	10	第13図 木製品実測図(6)	19
第7図 石製品・金属製品実測図	11		

図版目次

- 巻頭図版 Dトレンチ木材群検出状況
Eトレンチ杭列・柴検出状況
- 図版1 遺跡近景・調査状況(1)
図版2 調査状況(2)・(3)
図版3 調査状況(4)・土層断面
図版4 土層断面・SK1
図版5 SK1・木杭
図版6 木杭・Eトレンチ柴(槽)
検出状況
図版7 木材群検出状況・土層断面
図版8 遺物出土状況(1)
図版9 遺物出土状況(2)
- 図版10 遺物出土状況(3)
図版11 遺物出土状況(4)
図版12 出土土器
図版13 石製品・金属製品・自然遺物
図版14 木製品(1)
図版15 木製品(2)
図版16 木製品(3)
図版17 木製品(4)
図版18 木製品(5)
図版19 木製品(6)
図版20 木杭先端(EP1・EP2)



- | | | | | |
|-----------|------------|-----------|------------|-----------|
| 1 生石4遺跡 | 2 生石2遺跡 | 3 史跡城輪跡 | 4 下小松遺跡跡 | 5 新田目B遺跡 |
| 6 新田目城跡 | 7 豊原遺跡 | 8 豊原B遺跡 | 9 庵田遺跡 | 10 安田遺跡 |
| 11 茅針谷地遺跡 | 12 史跡堂の前遺跡 | 13 後田遺跡 | 14 沼田遺跡 | 15 俵田遺跡 |
| 16 上曾根遺跡 | 17 上ノ田遺跡 | 18 境興野遺跡 | 19 北田遺跡 | 20 関B遺跡 |
| 21 新青皮遺跡 | 22 南興野遺跡 | 23 手蔵田2遺跡 | 24 手蔵田12遺跡 | 25 桜林興野遺跡 |
| 26 高阿弥田遺跡 | 27 千河原遺跡 | 28 廿六木遺跡 | 29 八森遺跡 | 30 北境遺跡 |

第1図 生石4遺跡と周辺の遺跡

I 調査の経緯

本遺跡は、昭和61年度に発掘調査（第1次調査）が行われ平安時代（9世紀代）と考えられる道路跡や丸木舟を転用した樋が検出され、注目を集めたところである。

ここに昨年度からの継続として、昭和62年度県営圃場整備事業・山元地区が計画され、山形県教育委員会では、遺跡保護と開発事業との調整を図るため、昭和61年10月15日に分布調査による試掘調査を行った。その結果、第1次調査も含め平田川の南北に広がる遺跡範囲が確認された。それを基に、最上川右岸土地改良事務所・大町溝土地改良区・酒田市教育委員会の関係機関による協議を重ねた結果、県教委が主体となり昭和62年4月15日～同5月14日まで緊急発掘調査（第2次調査）を実施するはこびとなったものである。なお、調査対象区は、遺跡内に係る東西方向の計画排水路（幅4m、延長446m）である。

調査は、まず5×5mを単位とするグリッド設定から入り、方眼の基準線は計画排水路の中軸線に合わせX軸とし、それに直交するY軸とそれぞれ設定した。各グリッド毎の番号は、北西隅のX・Y座標で表わすこととした。

次に計画排水路内にグリッドを基準とするトレンチ（2×5m）を25m間隔で入れ、遺構・遺物の広がり・深さ等について調べ、その後、重機を用いて幅2・4mでトレンチの粗掘りに入り、順次延長していった。トレンチは、便宜上A～Iトレンチと区分した。

面精査はAトレンチから入り、手掘りによる掘り下げ・面削りを行い、遺構・遺物の検出を進めた。

調査後半からは、検出遺構・遺物の写真撮影や平面・セクション実測及びレベル記入等の記録作業を進め、延べ15日間の調査日程を終了した。

II 遺跡の概観

本遺跡は、山形県酒田市大字生石字楯野内新田に所在する。酒田市街から東へ約7km、南北に連なる出羽丘陵の西側山麓から西へ1km程入った所である。標高は約7m、地目は水田である。第1次調査では、調査区の東側から厚く泥炭層が確認され、今回の調査区では、中央付近が顕著である（第3図）。出羽丘陵と新井田川以南の間には、南北に延びる後背湿地が広がり、遺跡はその周辺、河川低地との境界付近に立地することが考えられる。

基本層序は、I～VII層に分けられる。遺物はII層下部から、遺構はV層上面が確認面で

ある。V層までの深さは、中央部が深く東西端にかけて浅くなる（第3・5図）。

遺構と遺物の分布は、D・Eトレンチにまともまっているが、全体に数量は少ない。遺構では、B・Dから杭列、Eトレンチから土壇・柴の束を伴う杭列を検出したのみである。またA～Eトレンチにおいて構状ないし不整形の落ち込みがみとめられるが、Bトレンチ以外は人為的な所産は確認できず自然地形に起因するようである。B・Cトレンチでは、径10cm前後の小ピットが分布するが、ほとんどが浅く柱穴に関連する柱根やアタリも未検出で、建物跡等を想定する配列については確認できなかった。遺物は、Dトレンチ南東部で木材群（巻頭図版 図版7）が出土した。溝状あるいは鞍部を呈する地形にまともって堆積した状態である。埋木と考えられる自然遺物が多いが、中に削り等の加工痕をとどめるものや、木製品あるいはその一部と思われる木材もみとめられる。土器は、Dトレンチ木材群側から須恵器坏1個体（RP4）が出土したのみで、各トレンチから破片少量の出土である（第4図）。

III 遺 構

本遺跡検出遺構は、土壇1・杭列2・柱穴17である。柱穴については、前述のように建物跡等は明らかにできなかった。

1 SK1土壇（第4図 図版4・5）

Eトレンチ西端、Dトレンチとの接続部に位置する。約半分は、トレンチ北壁に入り未調査である。また、覆土の精査は、土層断面観察部分であるトレンチ壁際のみである。

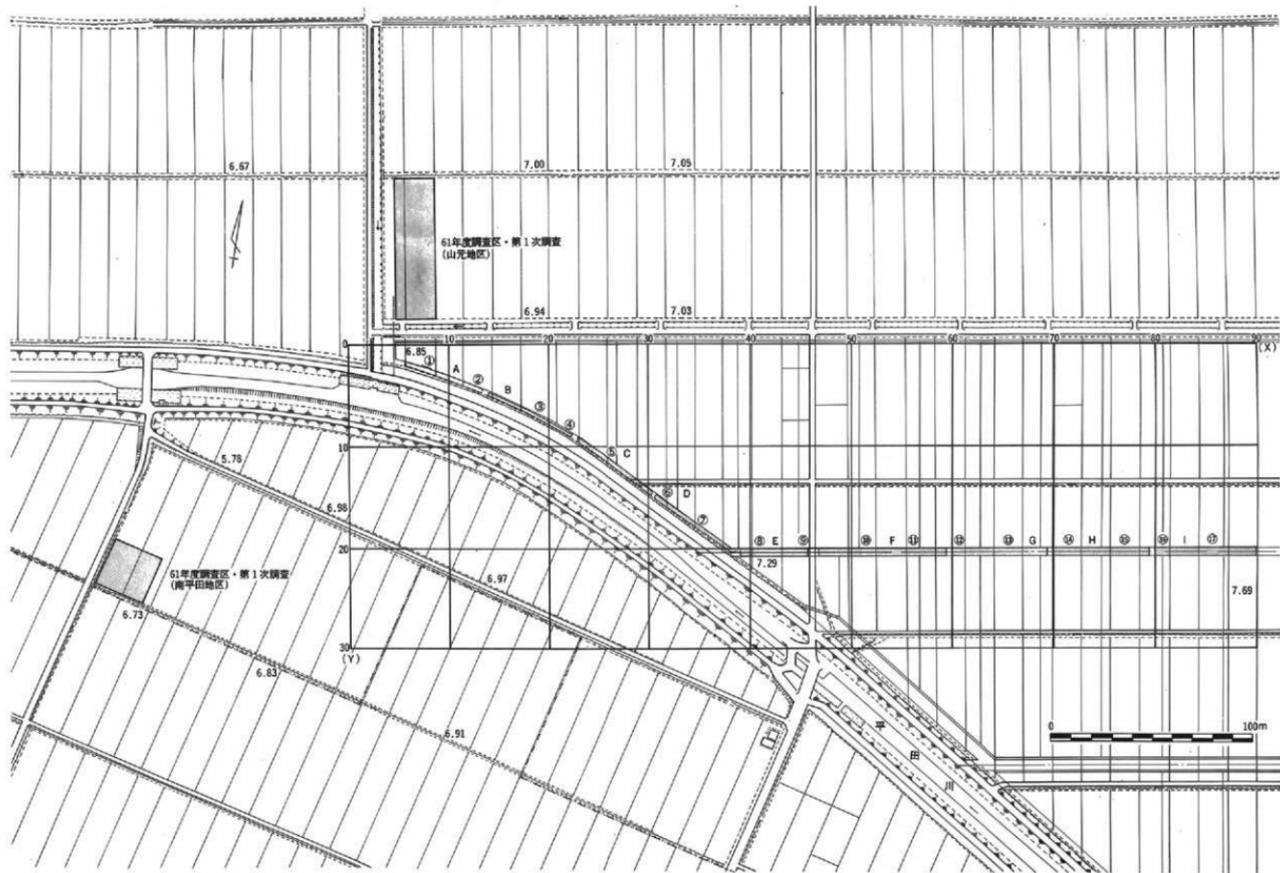
平面形は、略方形を呈し確認部分の大きさは83cmを測る。壁面の立上りは、フラスコ状に開き、東側は中位で屈曲して外側に開いて立上る。底面は、やや起伏をもつ。深さは、43cmを測る。出土遺物は、未検出で時期詳細は不明である。

2 杭 列（第4図 巻頭図版 図版5・6）

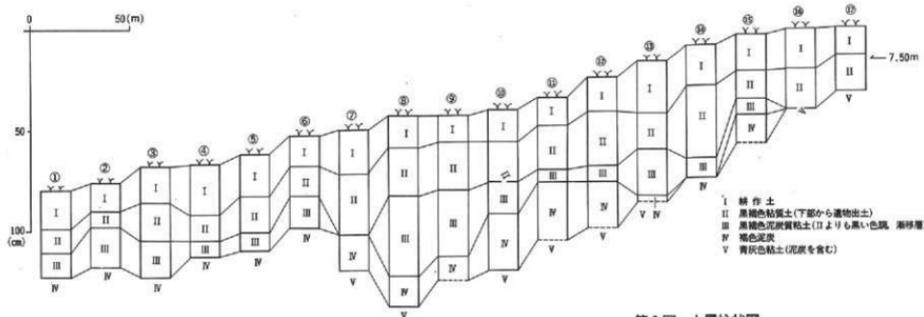
Eトレンチ西側に位置する。トレンチを横断する方向で確認された。起伏を呈する地形の微高地部分に並び、EP2のすぐ東側は泥炭層を呈する。

杭列は、2列みとめられ、東側はトレンチ北壁から南北に並び、中央部分で南東向きの方になる。西側は、ほぼ南北方向でトレンチを斜めに横断する。両方とも柴の束で杭をはさみ、柵状に支えている。また、東側の中央部分では、長い横木を押えるように杭が打ってある。杭は、EP1が長さ183cm・確認面からの深さ139cm、EP2が同じく180cm・104cmを測る。柴は、厚さ33～55cm、幅17～25cmを測る。

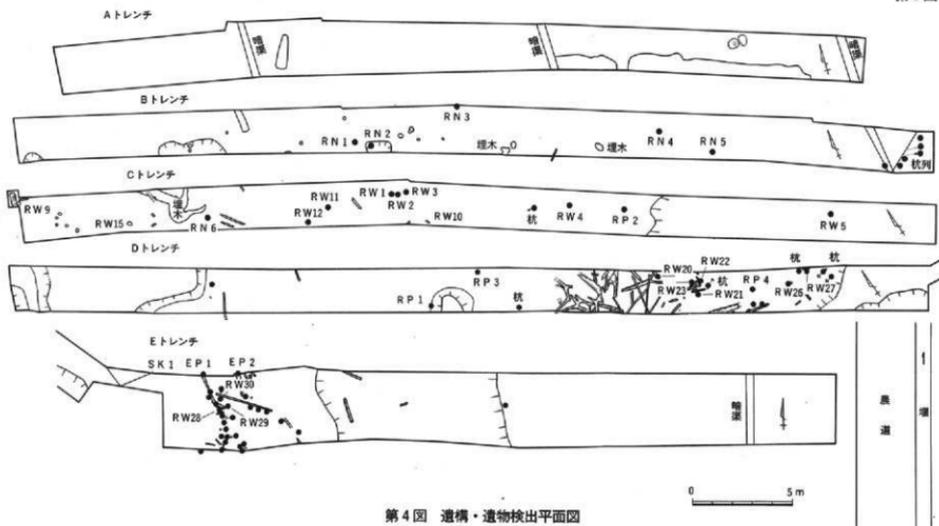
出土土器は、杭列間の確認面上部から須恵器坏小片がみとめられたのみである。



第2図 遺跡全体図

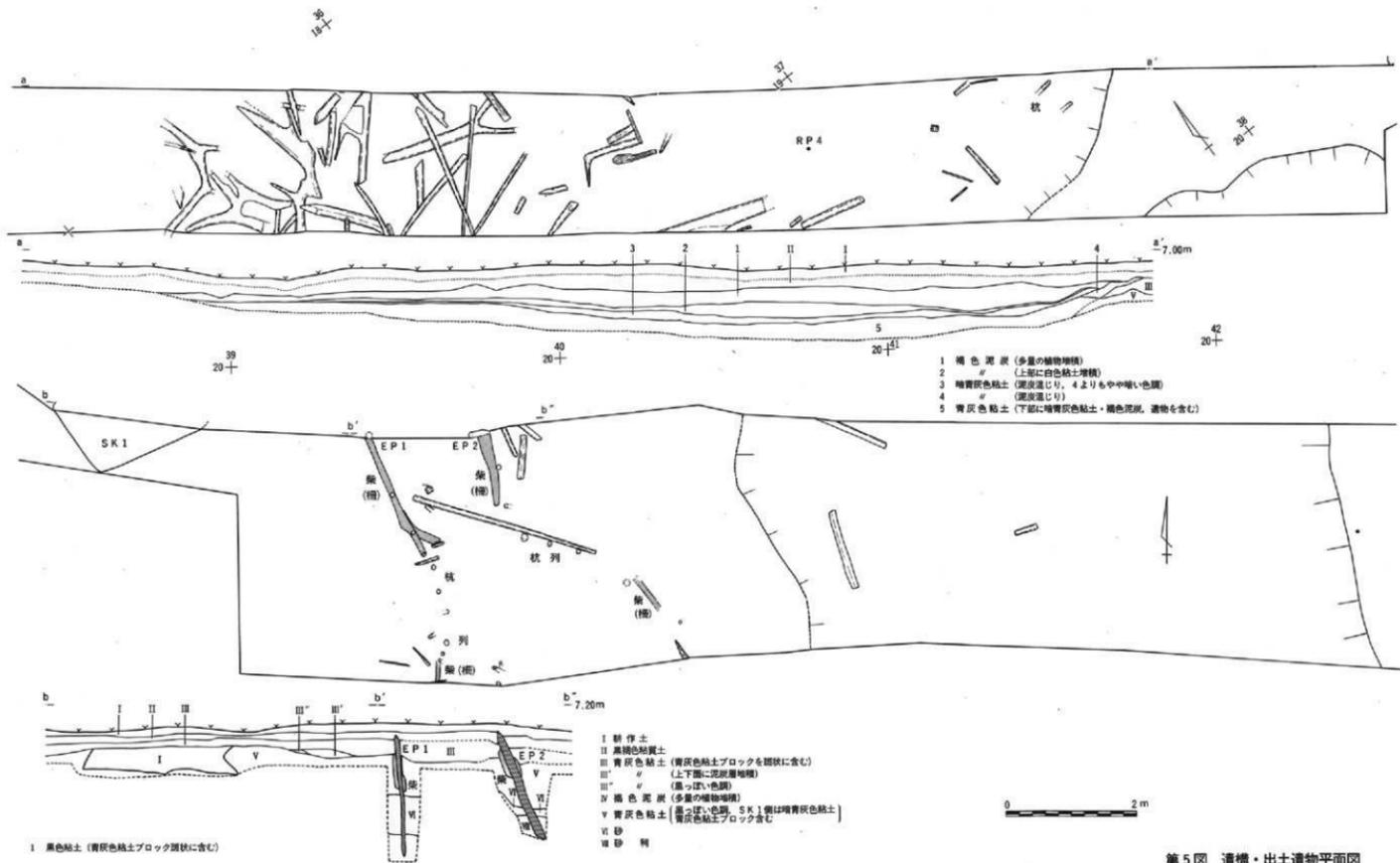


第3図 土層柱状図



第4図 遺構・遺物検出平面図

- RP 1: 須恵御簀
 RP 2: # #
 RP 3: # 高台付坪
 RP 4: # 坪
 RW 1: 板状木製品
 RW 2: 板状木製品
 RW 3: #
 RW 4: #
 RW 5: 部材
 RW 6: 板状木製品
 RW 9: #
 RW10: 曲物
 RW11: 板状木製品
 RW12: 部材
 RW15: 角材
 RW20: 部材
 RW21: #
 RW22: 板状木製品
 RW23: 部材
 RW26: 板状木製品
 RW27: 板状木製品
 RW28: 板状木製品
 RW29: #
 RW30: #
 RN 1: 磁子
 RN 2: #
 RN 3: #
 RN 4: #
 RN 5: #
 RN 6: フルミ



IV 出土遺物

1 土器 本遺跡からは須恵器・赤焼土器・中世陶器が出土した。

(1) 土師器

出土した土器のすべてが破片で復元可能なものはない。高台付坏・甕の2種類が出土した。

a) 高台付坏 底部破片が1点出土した(第6図3)、底部外周より高台が付けられている。器内に黒色処理を施す。

b) 甕 体部破片で内面ナデ調整されているもの(図版12-29~33)。小型甕の口縁部2点(図版12-27・28)。ヘラ削り調整されている体部破片8点が出土した。

(2) 須恵器

今回の調査では、破片14点が出土し、形態から坏・高台付坏・蓋・甕・埴に分けられる。

a) 坏 6点出土した。RP4(第6図2)は、底部を回転糸切り手法で切り離し、体部が内弯気味に立ち上り、口縁部端が若干外反する。第6図1は、底部がヘラ調整され、底径・口径ともに大きく、口縁が内弯気味に立ち、底体部にヘラ削り跡を残している。

b) 高台付坏 2点出土している。2点とも底部破片で、回転ヘラ切り手法により切り離されている。やや外側に張り高台が底部外周内側に付く。(第6図4・5)

c) 蓋 天井部は平坦で回転ナデ調整をうけている。(第6図6)

d) 甕 破片5点が出土した。RP1(第6図14)は肩部破片で外面が格子目状タタキ・内面平行アテ痕を有する。RP2(図版12-14)は両面が回転ナデ調整されている。

e) 埴 口縁部破片で、外面が回転ナデ・内面がハケ調整されている。(第6図9)

(3) 赤焼土器

甕の体部破片8点、口縁部1点が出土した。体部破片で外面に平行タタキ・内面ナデ調整されているもの(第6図7・8・10・11)、両面にハケ調整されているもの(第6図12)、外面ケズリ調整・内面ハケ調整されているもの(第6図13)に分けられる。口縁部は、大きく外弯し先端が垂直に立ち上る。

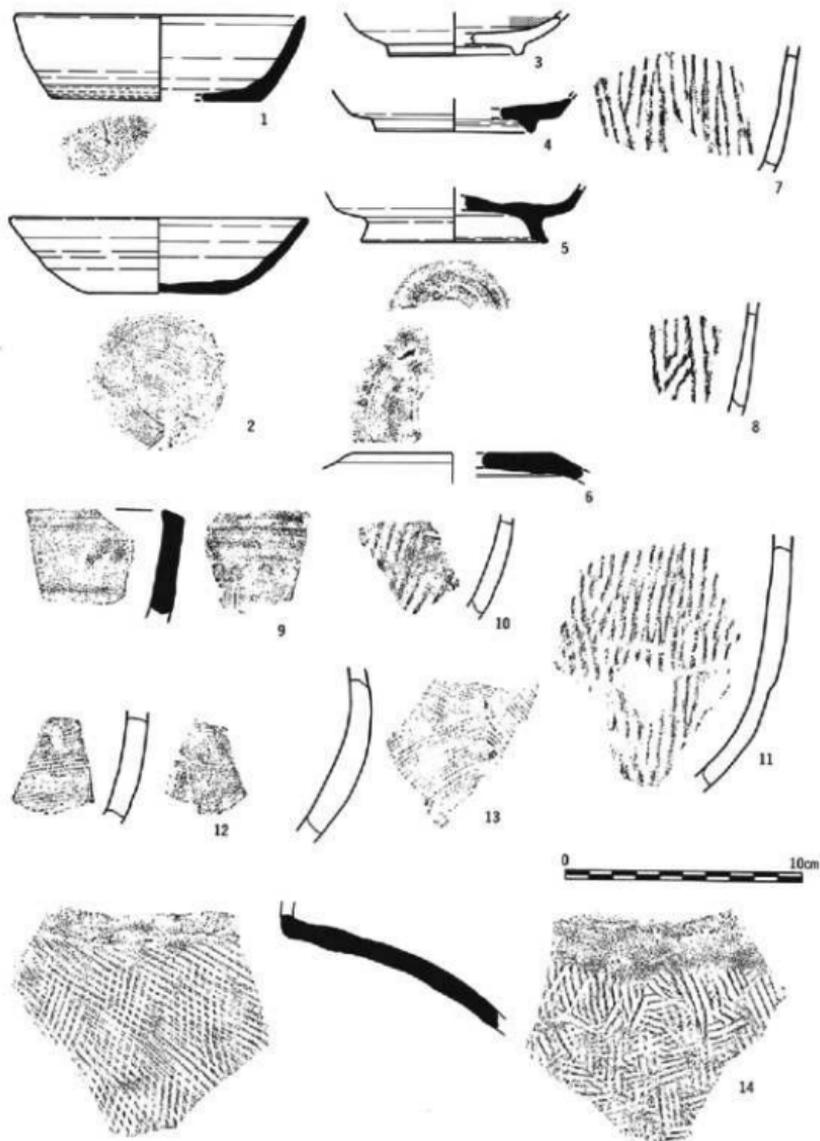
(4) 中世~近世陶器 (図版12-34~38)

瓦質陶器の火鉢脚1点、近世陶器の摺鉢破片8点が出土した。製作地は不明である。

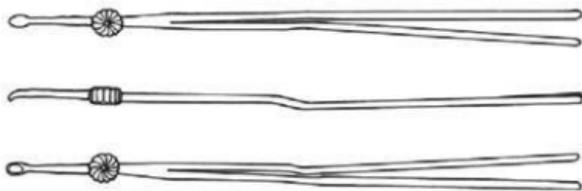
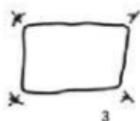
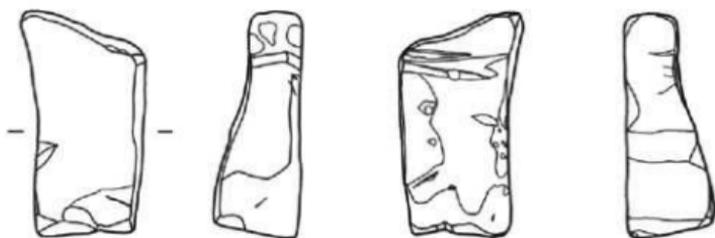
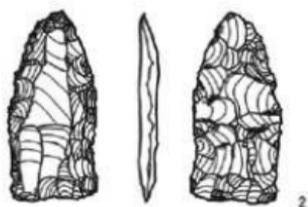
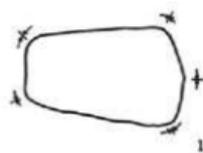
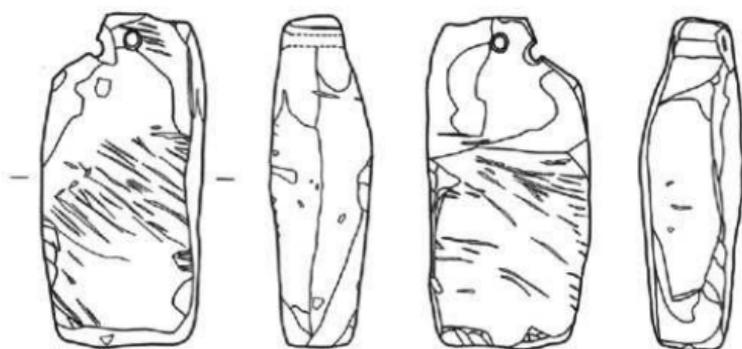
2 石製品

a) 篋状石製品 第7図2は、両面加工が施され刃部の調整は精緻で背面全体に及ぶ。

b) 砥石 第7図1は、板状の石材で一端に6mm前後の丸穴を2カ所貫通されている。各面を磨面に用いている。第7図3は、角状の石材で各面を用いている。



第6图 出土土器实测图



第7圖 石製品・金屬製品実測図

3 木製品

37点の木製品が出土した。木製品の形態から建築部材（杭・板材等）・曲物・祭祀用具などが確認された。板状木製品・部材・曲物・棒状木製品・角材状木製品・斎串・斎串状木製品・杭・下駄状木製品に分けて述べていく。

板状木製品

RW2①（第8図1）は、板状木製品で一先端から中央部方向へ10～12mmの所から5mmほど削り込まれ一段低くなっている。

RW3は、同じ地点より2点出土した。①（第11図6）は、先端部を曲線状につくりあげている。②（第10図1）は、一先端を曲線状につくり、もう一先端を一側面から鋭く斜めに切り落している。

RW8（第12図2）は、一端を曲線状に切り落とし、もう一端を斜めに切り落している。

RW12（第11図3）は、両側面中央部に凹状のくびれをもうけている。一先端部を4～5mm幅で5mmほど一段低く削り込んでいる。片面に縦方向に段差をつけている。

RW22（第13図2）は、表面中央部と先端部付近で厚さが一段低くなっている。

第9図4は、先端部を一側面より斜めに鋭く切り落している。一側面を刃状に薄くつくり、もう一側面を厚く残し刀背のようにしている。刀状木製品の先端の可能性がある。

RW28（第8図2）は、一先端を曲線状につくりあげている。また、一表面を先端方向へ削り込み薄くしている。もう一先端は、一側面より斜めに鋭く削り込んでいる。

RW29（第10図2）は、先端の角を削り落している。両側面は曲線状につくりあげている。表面に削り跡が2カ所確認された。

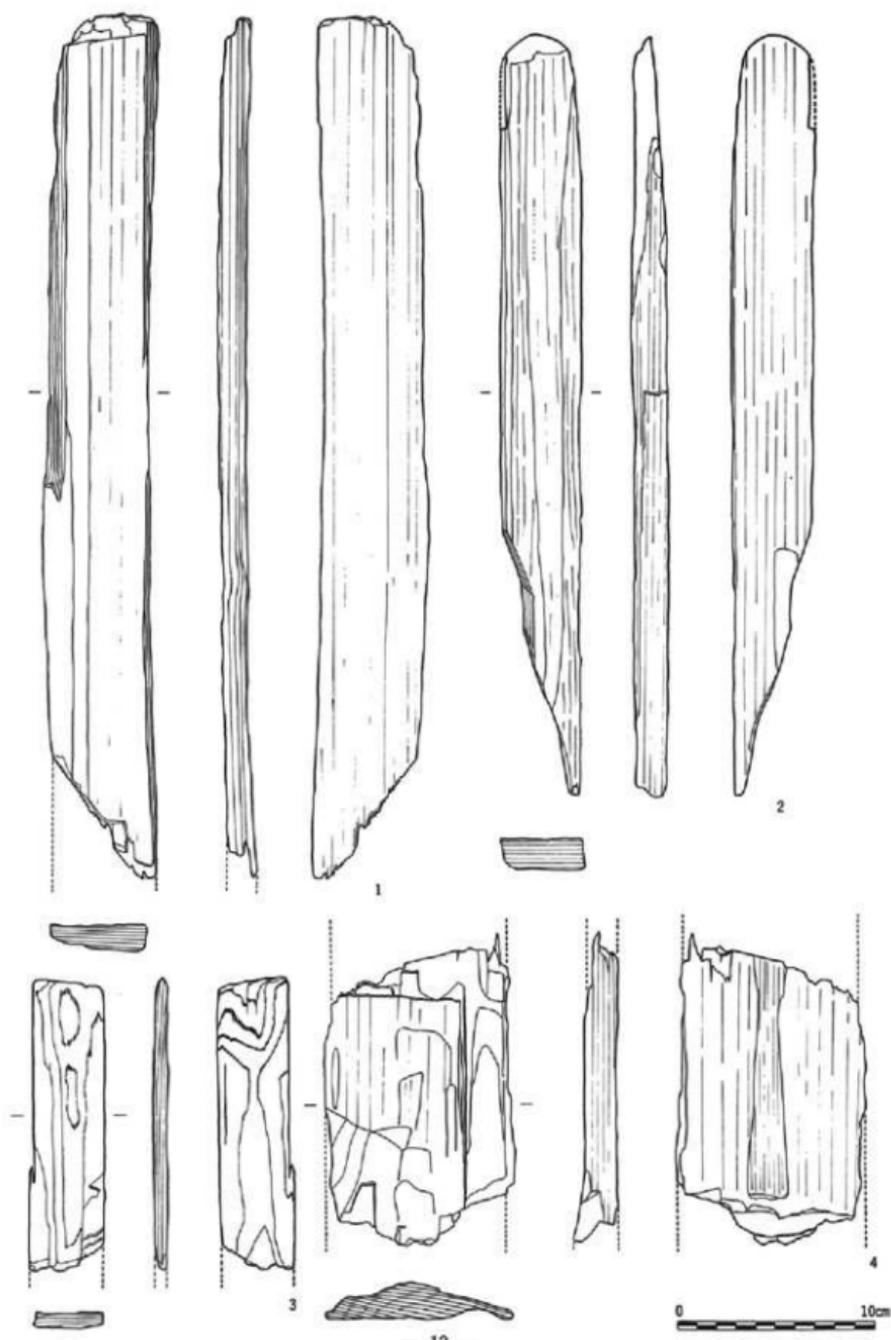
部 材

RW5（第12図4）は、部材と考えられる。一側面中央部を三角形に削り込み、また、一先端部分に20mm幅の突起を残し10mm前後削り込んでいる。先端は主頭状につくる。

RW20（第12図6）は、部材と考えられる。先端は曲線状に切り落している。先端付近より先端方向へ一側面が一段削り込まれている。欠損部付近に楕円形の穴が貫通しているが自然欠損によるものと考えられる。一表面に斜めに6本の傷状の跡がある。

RW21（第13図5）は、一側面中ほどより中心部へ斜めに切り落とし、中央部から先端まで幅が半分になる。もう一側面は、先端部付近でゆるやかな凹状に削り込んでいる。先端は、一側面より斜めに切り落されている。欠損部付近で両側面より25～30mmほど中心方向へ斜めに削り込んでいる。一表面に2本の傷状の跡がある。

RW23（第12図5）は、一先端部付近2カ所に径15mm前後の丸穴を貫通させている。もう一先端部付近一側面を斜めに10mmほど削り込んでいる。一側面をゆるやかな曲線状に削



第8图 木製品実測图(1)

り込んでいる。もう一側面は斜めに削り込み幅が10mmほどせまくなる。

曲物

RW10（第11図5）は、曲物の断片で、鬚引は確認されなかった。

棒状・角材状木製品

RW11（第9図3）は、棒状木製品で断面は正方形を呈する。先端は丸味をおびている。

RW15（第10図5）は、小型角材状のもので断面は平行四辺形を呈する。一側面に幅10mm・長さ90mm・厚さ7mmの突起をもつ。板材の断片の可能性はある。

斎串・斎串状木製品

第10図3斎串は、細長い板材の上端を圭頭状につくる。上端付近の両側面に上方から下方へ斜めに切り込みを入れている。また、中央付近の両側面に下方から上方へ斜めに切り込みを入れている。

RW1（第9図1）は、斎串状木製品で上端を圭頭状につくり、下端を剣先状につくる。

下駄状木製品

下駄状木製品（図版13-1）は、台状の両側から少し内寄りより縦断面が台形を呈する歯状の突起をつくる。台状の一先端部は、両角から20mmほどの所より中心方向へU字状に削り込まれている。鼻緒孔が確認されないことから下駄ではないと考えられる。

第11図4・第10図6は、小型の丸木で、先端に切断跡が残る。

杭

D・E・Hトレンチから出土した。第14図1の杭は、先端部より約15cmの所から先端方向へ削り込んでいる。枝部分は、枝元より切断されている。上部は、表面欠損が激しい。第14図2は、第14図1と同じく先端部より約15cmの所から先端方向へ削り込んでいる。先端部付近に樹皮がついている。

木製品と出土地点

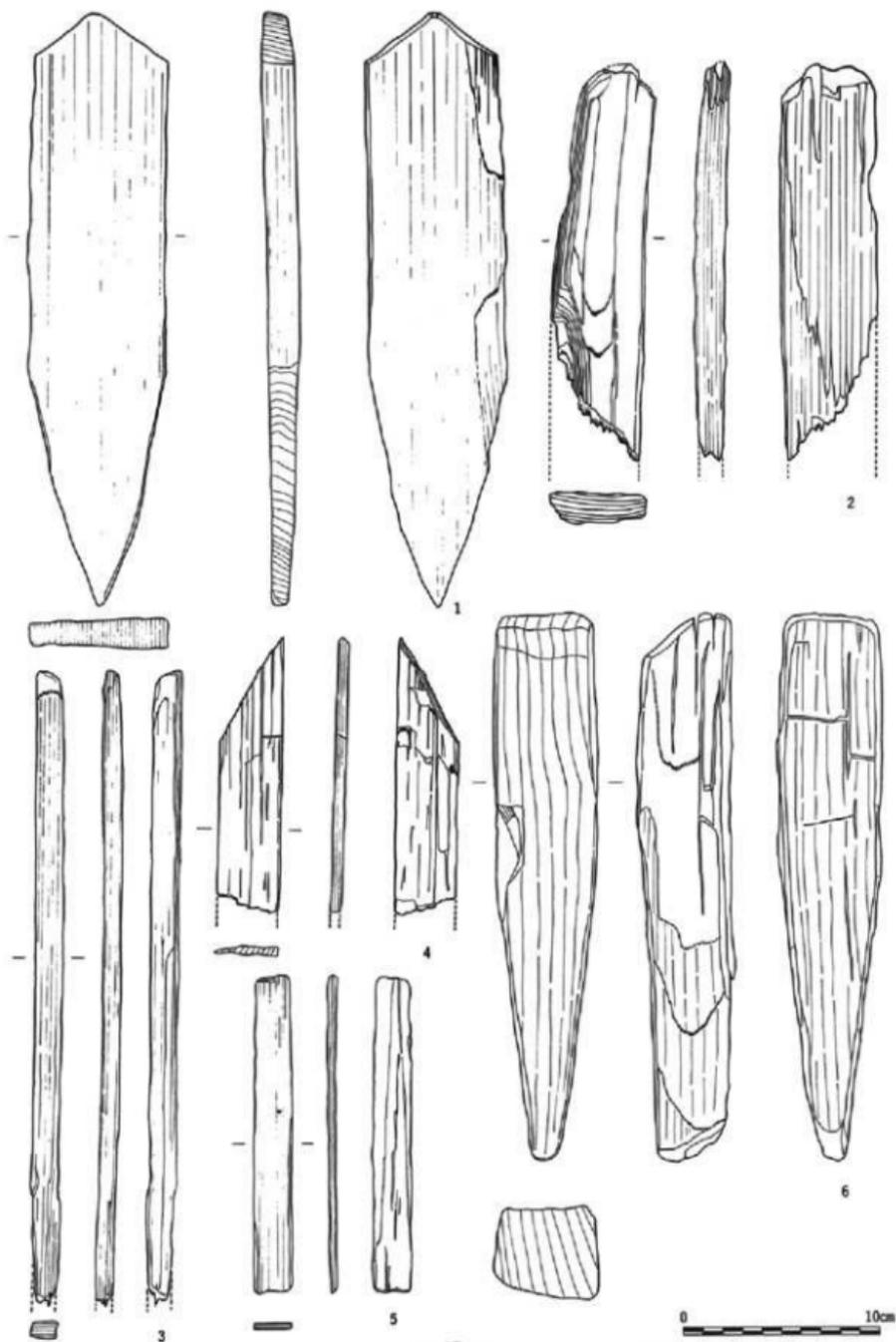
今回の調査で出土した木製品総数は37点を数える。C～E・G・Hトレンチの5カ所から出土している。C・Dトレンチより総出土数の2/3以上が出土している。また、C・Dトレンチからは多数の自然木も確認された。

4 金属製品

箸 先端部分が耳かき状につくられている。飾りに花紋が彫られている。（第7図4）

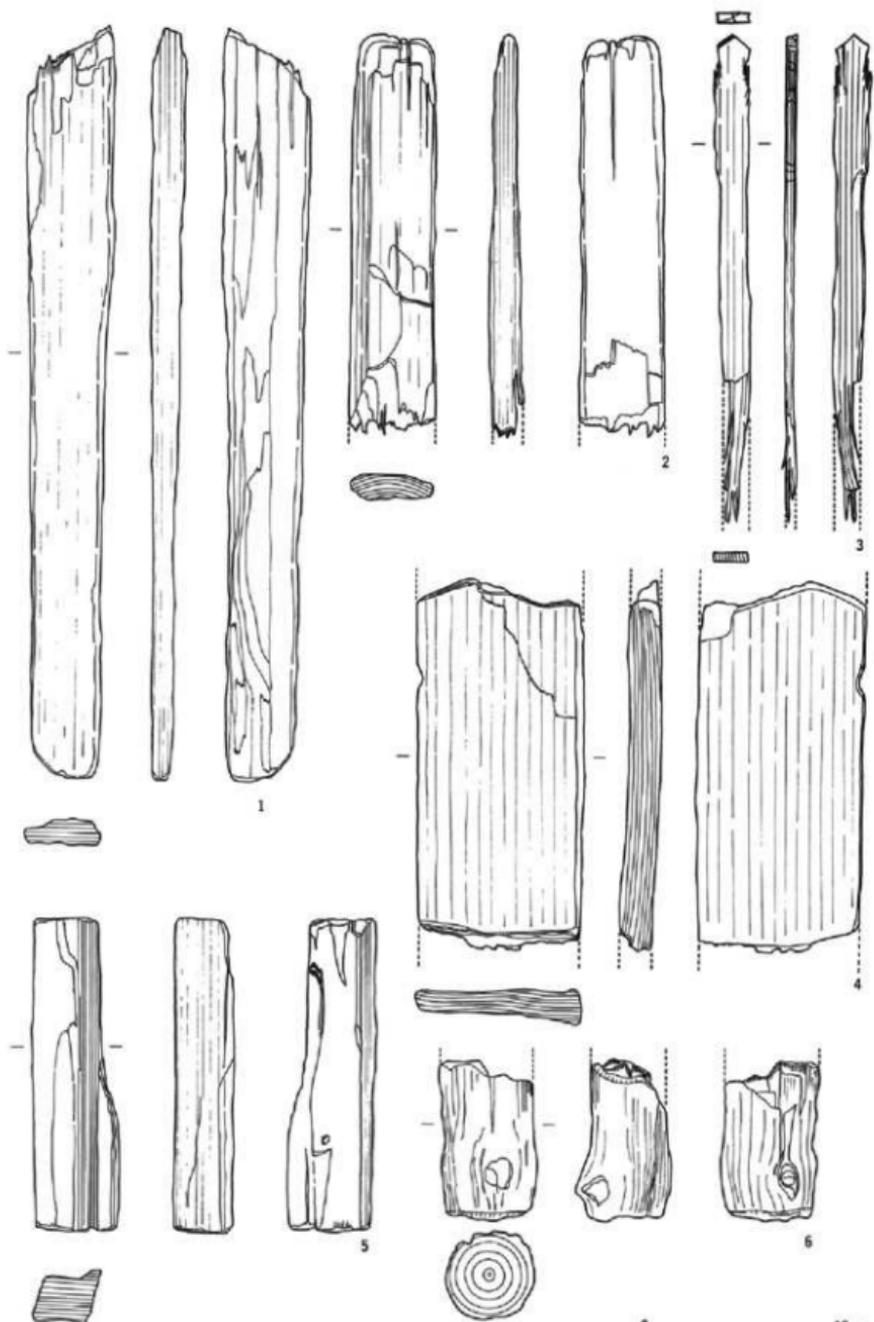
5 自然遺物

Bトレンチから長径10mm・短径7mmほどの楕円形種子11点、ヒョウタンの実と思われるものの破片2点、Cトレンチからクルミ3点が出土した。（図版13-5）



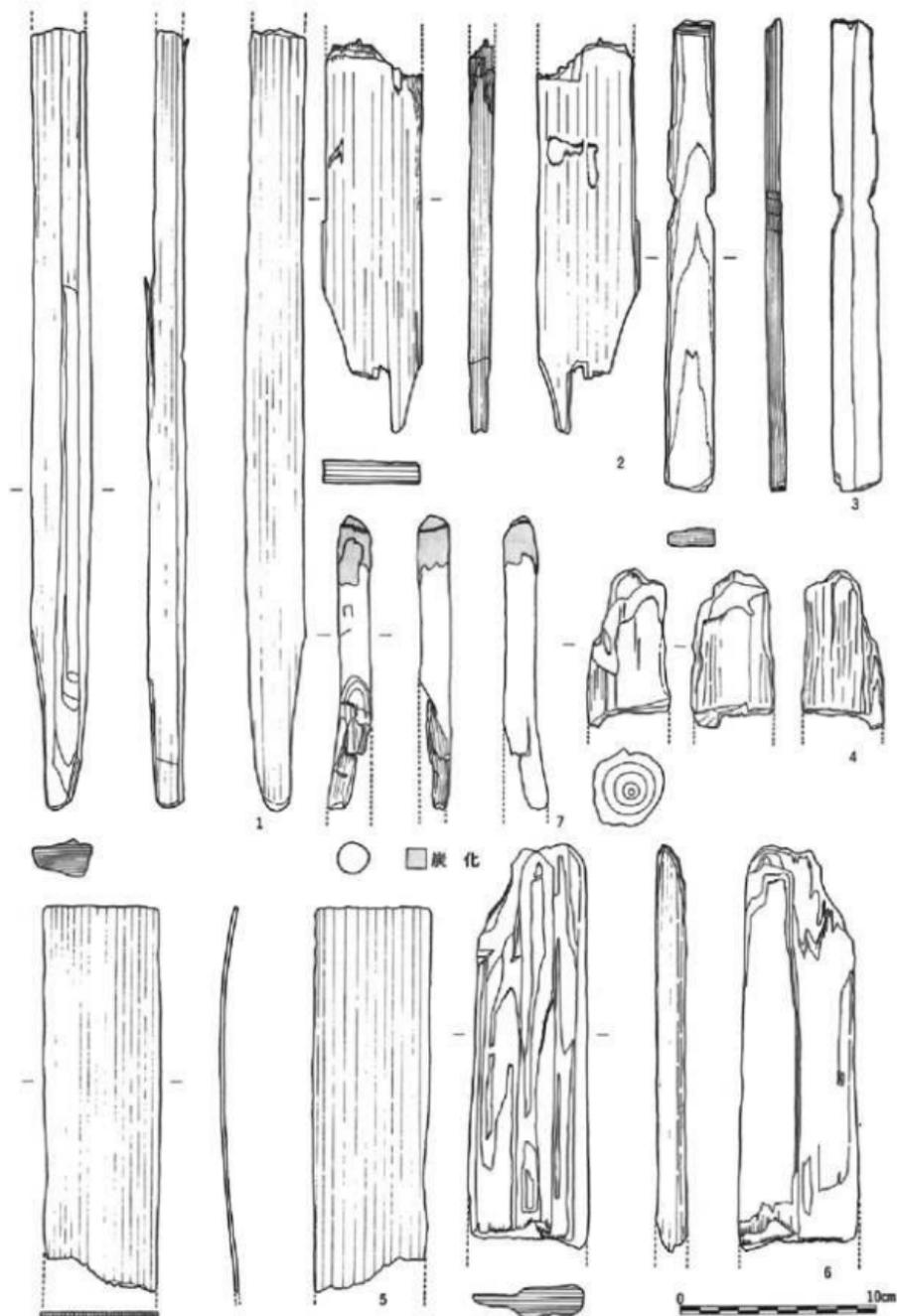
0 10cm

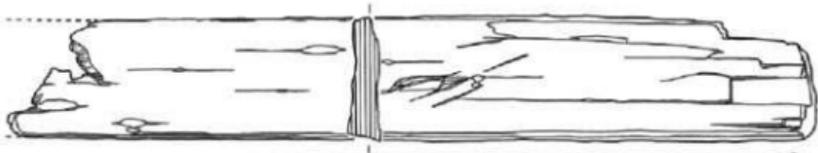
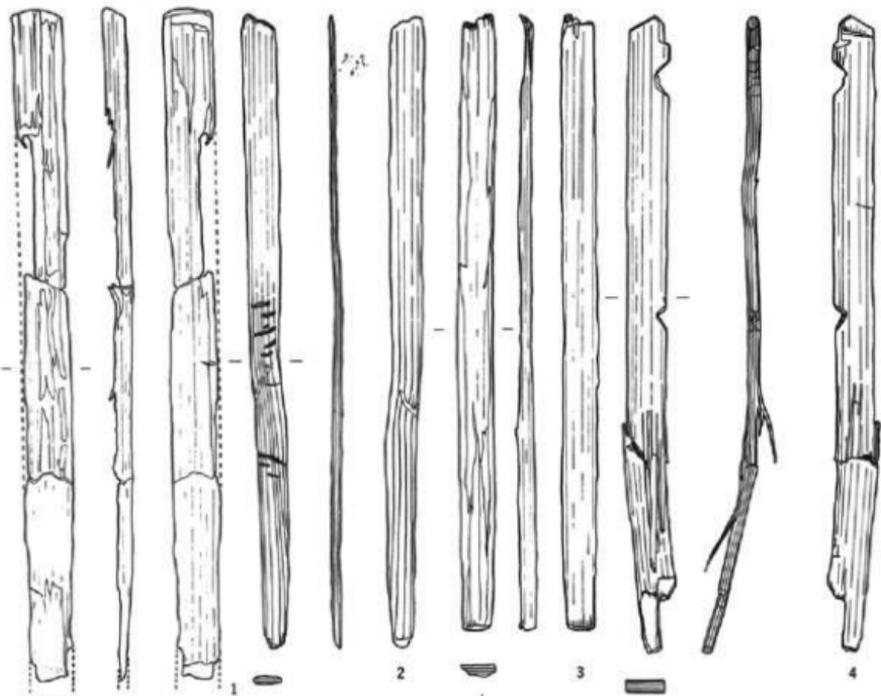
第9图 木製品実測図(2)

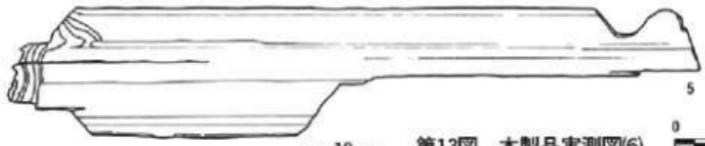
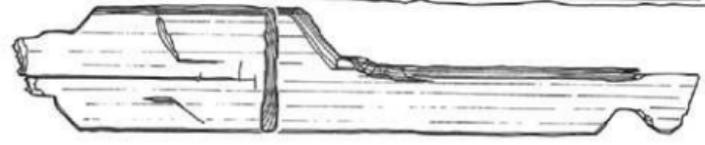
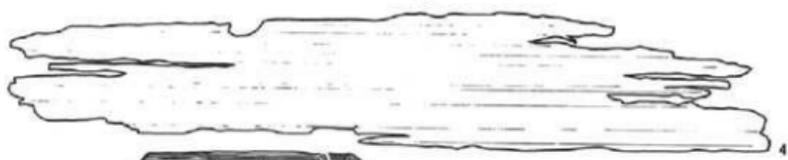
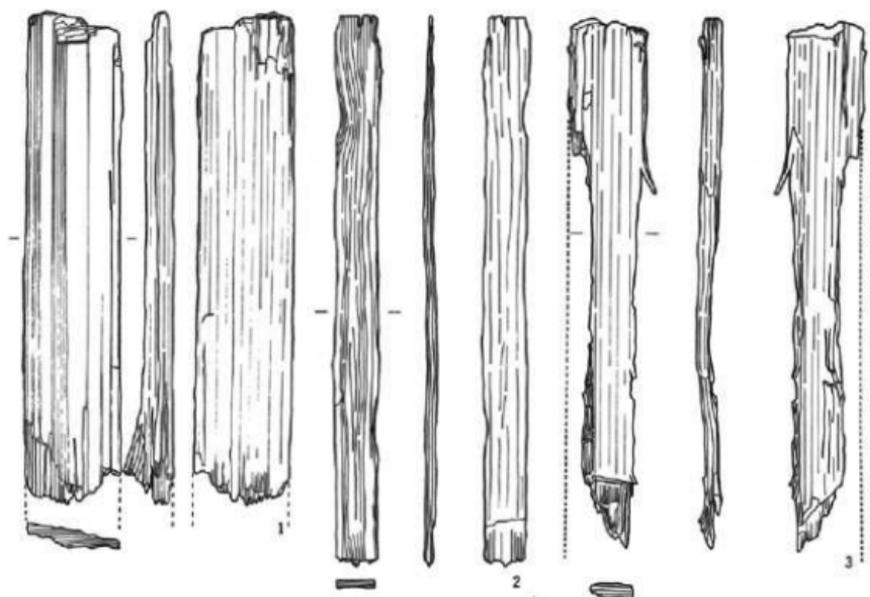


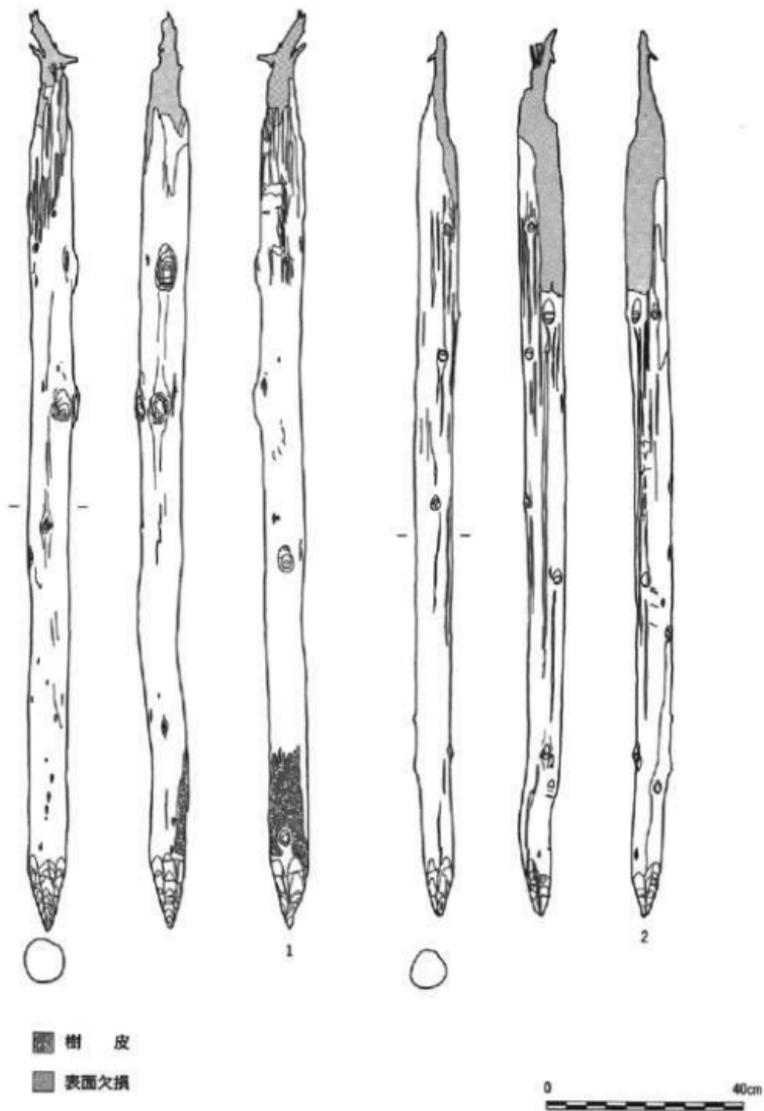
0 10cm

第10图 木製品実測图(3)









第14図 木製品実測図(7)

表一 須恵器・陶器観察表

挿図 番号	図版 番号	器種	出土地点	計測値 (mm)			色調	胎土	焼成	底部 切跡	調整		備考
				口径	底径	器高					外面	内面	
6-2	12-2	坏	Dトレンチ	127	58	44	明緑灰	緻密	良	器高9.5 器径10.5	回転ナデ	回転ナデ	RP4
6-1	12-1	坏	Hトレンチ	(124)	(88)	38	灰白	緻密	良		回転ナデ	回転ナデ	
	12-7	坏	表採				灰	緻密	良		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片
	12-8	坏	Dトレンチ				灰白	緻密	不良		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片
	12-12	坏	Hトレンチ				灰白	緻密	良		回転ナデ	回転ナデ	体部破片
	12-9	坏	Eトレンチ				灰	緻密	良		回転ナデ	回転ナデ	体部破片
6-14	12-15	壺	Dトレンチ				灰白	小砂混	良		叩き	アテ痕	口縁部破片 器高1
	12-14	壺	Cトレンチ				灰	細砂混	良		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片 器高1
	12-11	壺	Hトレンチ				灰	小砂混	良		回転ナデ	回転ナデ	体部破片
	12-6	壺	Fトレンチ				灰白	細砂混	良		回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片
6-6	12-10	蓋	Iトレンチ			82	灰白	小砂混	良				天井部破片
6-4	12-4	高台付坏	Dトレンチ			64	灰白	微砂混	良				口縁部破片 器高3
6-5	12-3	高台付坏	Iトレンチ			72	灰白	緻密	不良		回転ナデ	回転ナデ	底部破片
6-9	12-5	埴	Iトレンチ				灰白	細砂混	良		回転ナデ	ハケ目	口縁部破片
	12-13		Iトレンチ				明緑灰	緻密	良				体部破片

表二 赤焼土器観察表

挿図 番号	図版 番号	器種	出土地点	色調	胎土	焼成	調整		備考
							外面	内面	
	12-22	壺	Dトレンチ	明緑灰	小砂混	良	回転ナデ	回転ナデ	体部破片
6-12	12-20	壺	Dトレンチ	浅黄橙	小砂混	良	ハケ目	ハケ目	体部破片
	12-21	壺	Eトレンチ	浅黄橙	微砂混	良	回転ナデ	回転ナデ	体部破片
	12-19	壺	Hトレンチ	灰白	緻密	良	回転ナデ	回転ナデ	口縁部破片
	12-24	壺	Hトレンチ	濁灰	小砂混	不良	回転ナデ	回転ナデ	体部破片
		壺	Hトレンチ	浅黄橙	微砂混	良			体部破片
6-11	12-25	壺	Hトレンチ	明緑灰	微砂混	良	平行叩き	ナデ	体部破片
6-8	12-18	壺	Hトレンチ	明緑灰	微砂混	良	平行叩き	ナデ	体部破片
6-7	12-17	壺	Hトレンチ	明緑灰	微砂混	良	平行叩き	ナデ	体部破片
6-13	12-23	壺	Iトレンチ	浅黄橙	小砂混	良	ヘラケズリ	ハケ目	体部破片
6-10	12-16	壺	表採	浅黄橙	緻密	良	平行叩き	ヘラケズリ アテ痕	体部破片

表三 石製品観察表

挿図 番号	図版 番号	種類	出土地点	計測値 (mm・g)				備考
				最大長	最大幅	最大厚	重量	
7-2	13-1	屈状石器	Hトレンチ	66	29	7	14.5	
7-3	13-2	砥石	Iトレンチ	78	42	29	120	
7-1	13-3	砥石	Iトレンチ	115	55	35	323	一端に丸穴を2カ所貫通させている。

表-4 木製品観察表

挿 番 号	図 番 号	版 番 号	種 別	出土地点	計 測 図(mm)			備 考
					長 さ	幅	厚	
9-1			筒状木製品	Cトレンチ	304	71	16	RW1
8-1	14-1		板状木製品	Cトレンチ	(445)	55	14	RW2-①
9-2	15-2		板状木製品	Cトレンチ	(204)	49	16	RW2-②
11-6	19-8		板状木製品	Cトレンチ	(211)	61	15	RW3-①
10-1	6-1		板状木製品	Cトレンチ	(385)	44	14	RW3-②
12-3	17-3		板状木製品	Cトレンチ	(638)	45	17	RW4
12-4	17-4		部 材	Cトレンチ	650	42	12	RW5
12-2	17-2		板状木製品	Cトレンチ	645	34	8	RW8
13-3	18-3		板状木製品	Cトレンチ	546	79	20	RW9-①
12-1	14-1		板状木製品	Cトレンチ	682	50	22	RW9-②
13-4	18-4		板状木製品	Cトレンチ	(784)	(140)	8	RW9-③
11-5	19-9		曲 物	Cトレンチ	119	61	1.5	RW10
9-3	15-3		棒状木製品	Cトレンチ	(325)	9	9	RW11
11-3	19-4		部 材	Cトレンチ	245	24	10	RW12
10-5	16-5		角 材	Cトレンチ	160	42	25	RW15
12-6	17-6		部 材	Dトレンチ	(820)	137	33	RW20
13-5	18-5		部 材	Dトレンチ	(705)	130	17	RW21
13-2	18-2		板状木製品	Dトレンチ	(566)	42	9	RW22
12-5	17-5		部 材	Dトレンチ	768	75	16	RW23 <small>2カ所に径15mm前後の丸穴を貫通させている。</small>
8-4	14-4		板状木製品	Dトレンチ	(162)	96	17.5	RW26
11-1	19-3		棒状木製品	Dトレンチ	401	31	19	RW27
9-6	15-6		杭状木製品	Dトレンチ	273	53	47	
9-4	15-4		板状木製品	Dトレンチ	(143)	32	5	刃状木製品の可能性がある。
10-3	16-3		簀 串	Dトレンチ	(249)	18	5	
13-1	18-1		板 材	Dトレンチ	(500)	10.5	18	
11-7	19-5		棒	Dトレンチ	(151)	17	17	先端炭化
9-5	15-5		板状木製品	Dトレンチ	162	19	3	
8-2	14-2		板状木製品	Eトレンチ	394	41	16	RW28
10-2	16-2		板状木製品	Eトレンチ	(204)	44	14	RW29
10-4	16-4		板状木製品	Eトレンチ	(191)	85	17	RW30
11-2	19-7		部 材	Eトレンチ	(204)	50	13	
	15-1		下駄状木製品	Gトレンチ	(184)	88	17	
11-4	15-6		丸 木	Hトレンチ	(83)	39	35	
10-6	16-6		丸 木	Hトレンチ	(84)	49	43	
8-3	14-3		板状木製品	Hトレンチ	(149)	39	8	
14-2	19-1		杭	Hトレンチ	(1810)	80	70	上部表面欠損 E P 1
14-1	19-2		杭	Hトレンチ	(1870)	95	90	上部表面欠損 E P 2

※ 表中の()内数値は図上復元による推定値ないし残存値を示している。

V まとめ

今回の調査は、昭和62年度県営圃場整備事業・山元地区に係る緊急発掘調査で、前年度の第1次調査に継続する第2次調査である。調査期間は、昭和62年4月15日～同年5月14日の延15日間である。調査対象地区は、圃場整備計画排水路内で、発掘面積は、1,303㎡である。調査結果は、次のようにまとめられる。

遺構

遺構については、SK1・杭列・ピット・溝状ないし不整形の落ち込みを検出できたが、建物跡については未検出である。また、溝状ないし不整形の落ち込みについては、掘り込みを想定する壁の立上り等の、人為的な痕跡がみとめられず、Bトレンチ検出以外は自然地形によるものと考えられる。SK1は、部分検出であるが略方形を呈する土壌と考えられる。覆土は、縞状の堆積を示さず、比較的短期間に埋った特徴である。断面形態は、プラスチックを呈することから貯蔵用としての性格が推定されるが、出土遺物は未検出で、時期詳細については不明である。杭列は、B・D・Eトレンチでみとめられた。Bトレンチは、溝の辺に沿って並び、土留めの施設と考えられる。但し、溝の掘り込み面がI層下からであり、後世の時期が推定される。Dトレンチは、西側の木材群への傾斜変換付近にみとめられ、方向的にはEトレンチ検出のものとはほぼ併行するようである。Eトレンチは、2列みとめられ柴の束による柵状の施設を伴う特徴をもつ。また、中央付近には横木を通して杭で押さえる部分があり、段あるいは囲み様施設の一部かと推定する。D・Eトレンチ杭列の両側は緩い鞍部の泥炭層を呈しており、杭列部分が比較的安定した地山である。第1次調査では、両側に杭列を伴う盛土による(SF12)道路跡が検出されている。方向は、ほぼ東西方向で、幅6～6.5mを測る(伊藤・安部 1987年)。今回は、南北方向で、D・Eトレンチ杭列間の幅が約11mと異なるが、杭列が連続すること、盛土については未確認ながら杭列間は地山を呈すること等、断定はできないが、道路跡を想定する内容が考えられる。なお、本遺構の時期については、出土遺物が須恵器坏小片のみであり、現段階では平安時代頃の所産に留めたい。

遺物

今回の調査で出土した遺物は、土器破片44点、木製品38点、石製品3点、金属製品1点であった。

遺物は、比較的広範囲から散発的な出土をしている。その中でも種別に比較的古土数が多いトレンチは、須恵器D・H・Iトレンチ、赤焼土器D・Hトレンチ、土師器Hトレン

ち、木製品C・Dトレンチであった。逆に昨年度調査区山元地区付近に位置するA・Bトレンチからは種子・埋木等が出土しただけであった。C・D・Hトレンチから遺物が多数出土していることから本遺跡は東方へ広がることが確認された。集落等を想定し得るような遺構が未検出であることと、出土した土器等が、昨年度出土土器の形態・調整が類似することから9世紀代と捉えることができることから今年度調査区は、昨年度調査区(山元地区)で検出された集落に判う遺物包蔵地と考えられる。

竈状石器が1点出土していることから縄文～弥生時代の遺跡が近辺に存在する可能性がある。生石2遺跡とともに、庄内平野における縄文～弥生時代の分布・様相を探るうえで貴重な資料となろう。

今回の調査は、計画排水路に限定した線的なものであり、第1次調査との間は未調査区域である。道路跡がどのような関連をもつか、木質遺物を残す泥炭層の広がり、縄文～弥生時代の遺跡の存在など、今回の調査では未確認であるが、本遺跡を含む一帯は、今後の新たな発見を期待できる地域である。

参考文献

- | | | | |
|------------|---------|-------------------|--------------------|
| 安部 実 | (1982年) | 『豊原B遺跡発掘調査報告書』 | 山形県埋蔵文化財調査報告書第 55集 |
| 阿部明彦・渋谷孝雄 | (1983年) | 『宅田遺跡発掘調査報告書』 | 第 72集 |
| 奈良国立文化財研究所 | (1984年) | 『木器集成図録』「近畿古代篇」 | 奈良国立文化財研究所史料第27冊 |
| 安部 実・佐藤庄一 | (1984年) | 『新青渡遺跡第2次発掘調査報告書』 | 山形県埋蔵文化財調査報告書第 79集 |
| 阿部明彦・大泉俊彦 | (1985年) | 『手取田遺跡発掘調査報告書』 | 第 87集 |
| 安部 実・阿部明彦 | (1985年) | 『生石2遺跡発掘調査報告書』 | 第 89集 |
| 伊藤邦弘・安部 実 | (1987年) | 『生石4遺跡発掘調査報告書』 | 第 118集 |

圖 版



遺跡近景(西から)



調査状況(1)



調査状況(2)



調査状況(3)



調査状況(4)



土層断面(40-20G)



土層断面(70-20G)



SK I (西から)



SK I (東から)



木杭(EP1)



木 杭(EP2)



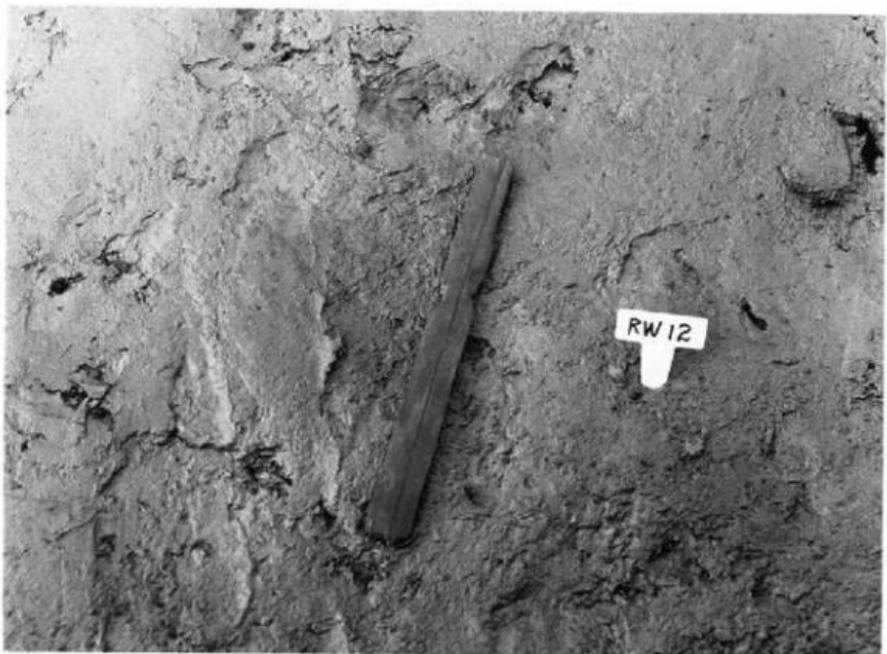
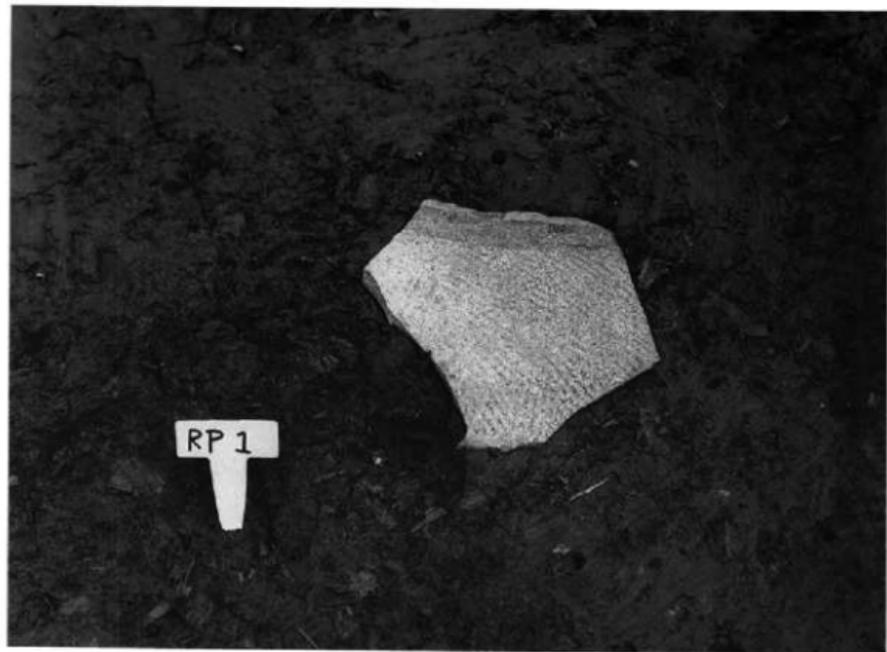
Eトレンチ・桟(柵)検出状況

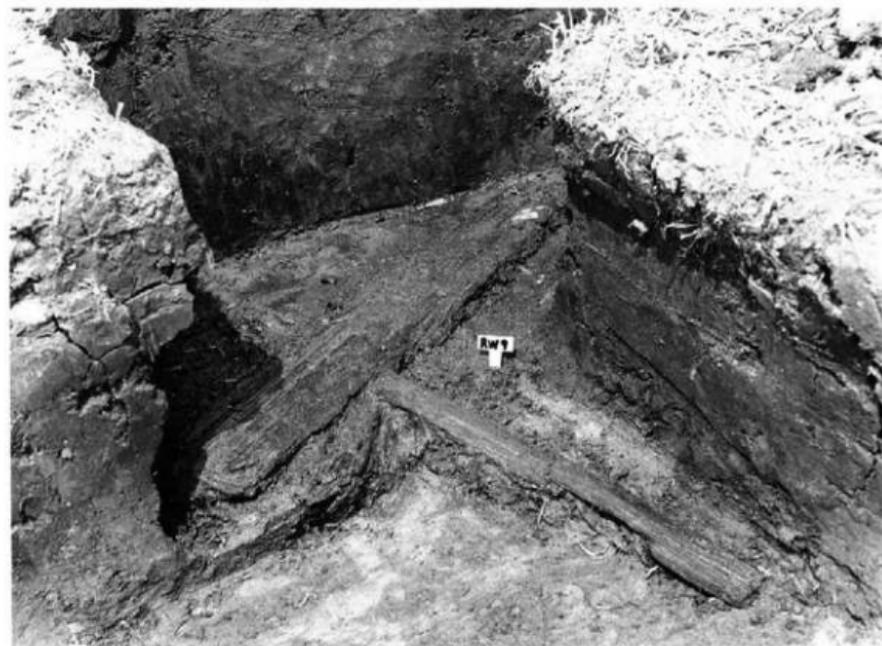


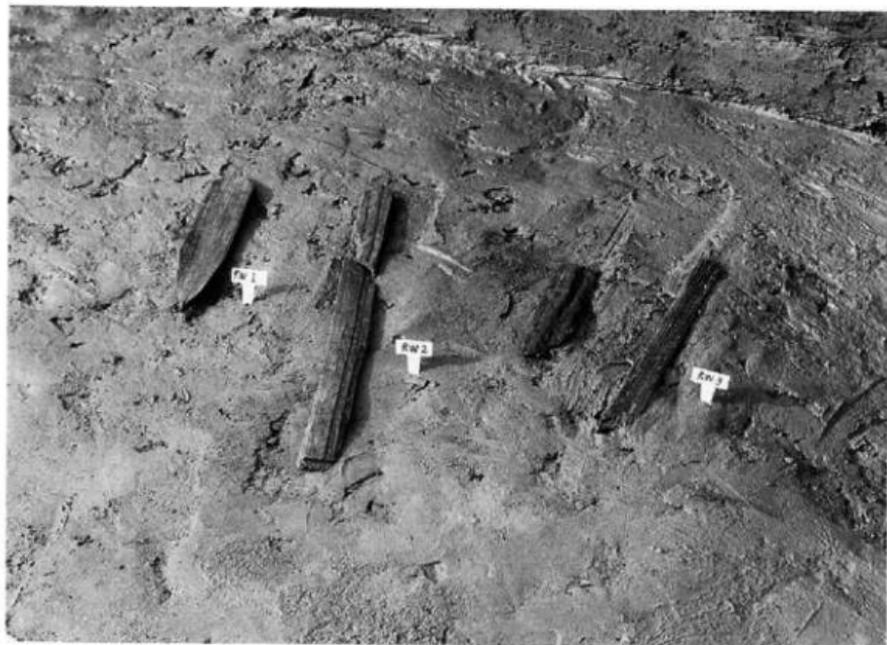
木材群検出状況(Dトレンチ)

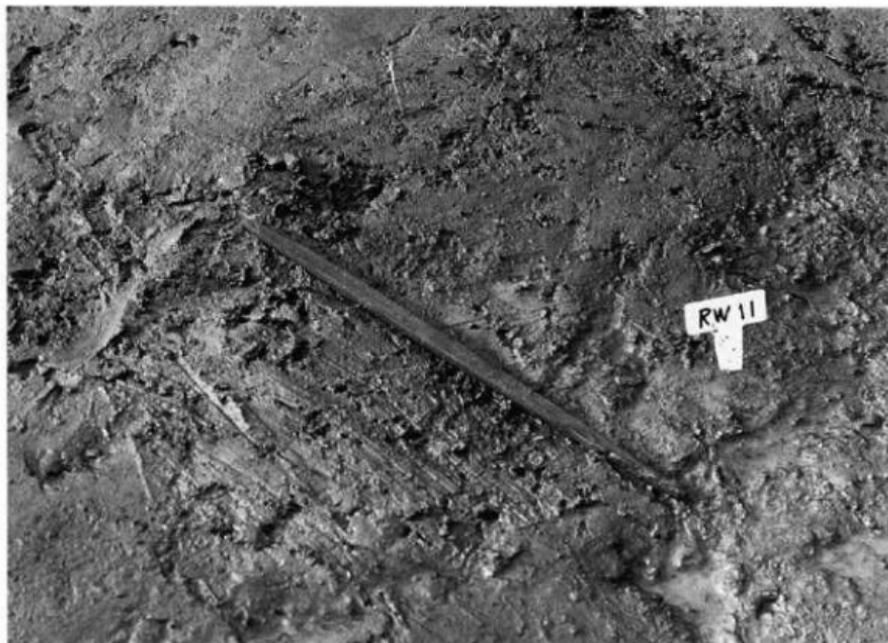


同 土層断面







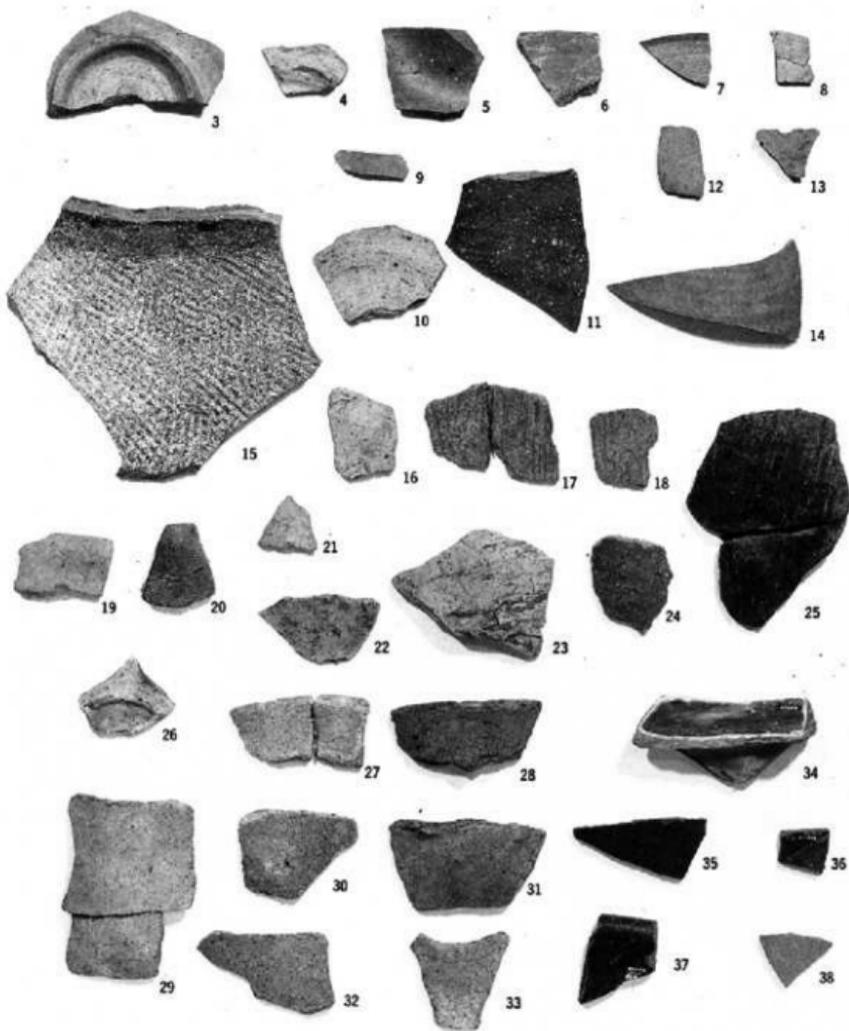




1



2



S=1/3



1

2



3

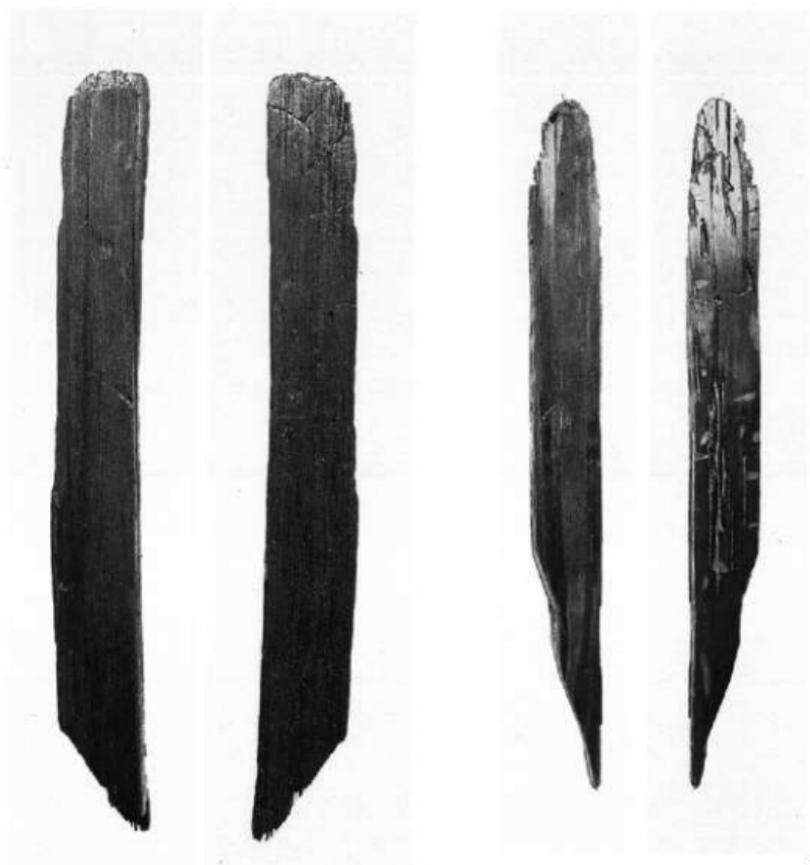


4



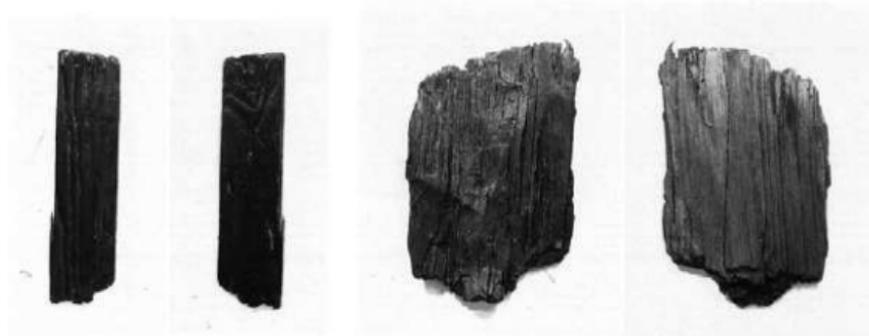
5

S=1/2



1

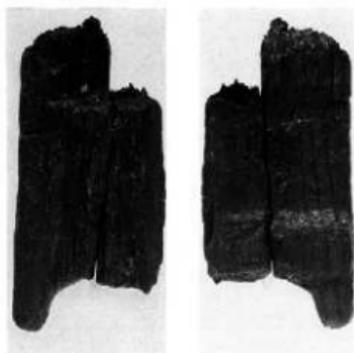
2



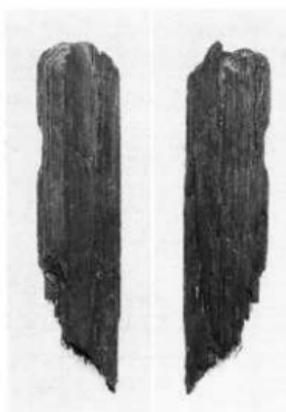
3

S=1/3

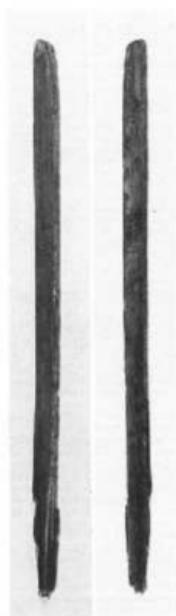
4



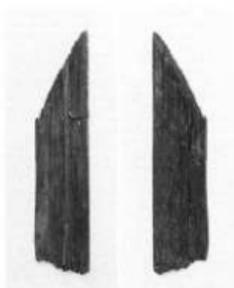
1



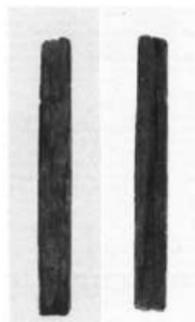
2



3



4

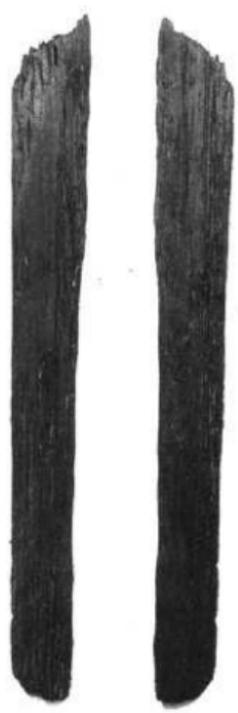


5



6

S=1/3



1



2



3



4

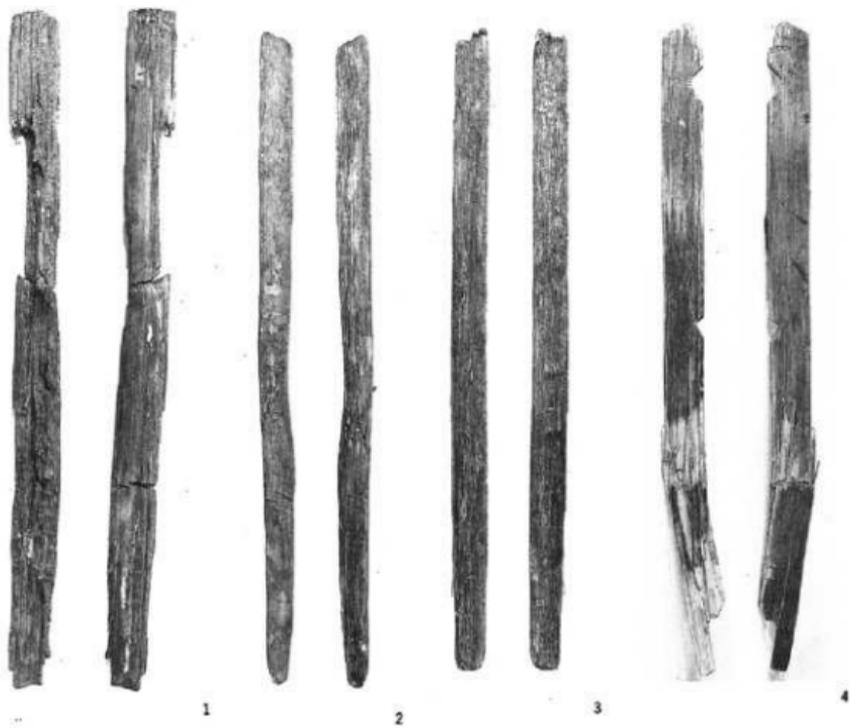


5

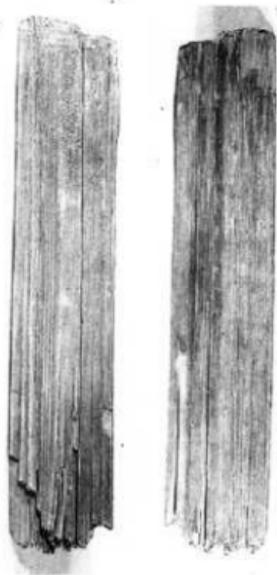


6

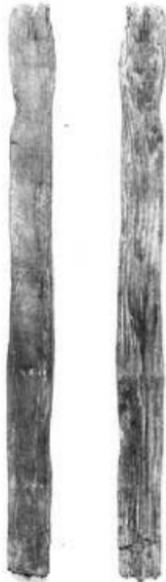
S=1/3



S=1/6



1



2



3



4



5



S=1/6

木製品(5)



1 2

1・2 S=1/9

3

4

5

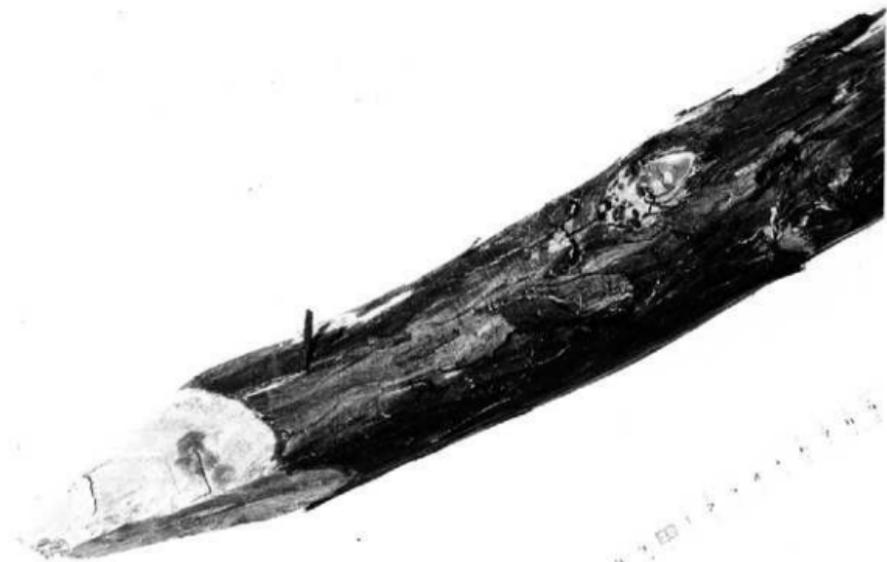
6

7

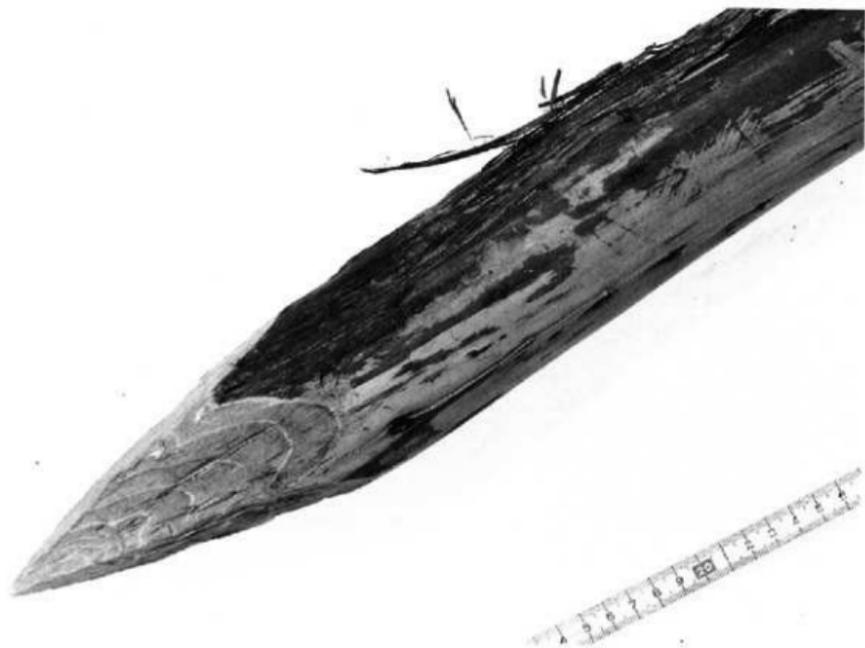
8

9

3~9 S=1/3



木枕先端(EP1)



同 (EP2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第125集

お いし
生 石 4 遺 跡

第 2 次 発 掘 調 査 報 告 書

昭和63年3月25日 印刷

昭和63年3月30日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 大場印刷株式会社
